

無茶々園の

早採りみかん

(極早生みかん) をお届けします。



早採りみかん

(極早生みかん)

温州みかん系統のなかで一番早い時期に食べ頃を迎える極早生みかんを中心とする10月期のみかんを、無茶々園では”早採りみかん”と呼んでいます。外観に青みが残っていても中身が先行して熟れていき、爽やかな風味・香りが楽しめる、柑橘シーズンの到来を告げるみかんです。

ひとむかし前、10月の“運動会”みかんは、青切りといって本来は11月以降に収穫する品種を早採りするのが一般的でした。いまは日南1号や上野早生といった熟期が早い特性がある品種を作っています。明浜で極早生品種を植え始めたのは1990年代のこと。1991年に台風19号による深刻な風害・塩害に遭い、枯れた樹の植え替えが必要になった際に導入されました。

旬は10月。10月はみかんが日に日に成熟していく時期でもあります。出始めはまだ外皮の青みが強いのですが、徐々に着色も進んでいきます。10月末に近づくにつれ、11月以降のみかんの風味に近づいてきます。

農産物の出来はどの作物も天候に左右されるものですが、柑橘類の中でも開花から収穫までの期間が短い極早生みかんは特にその傾向が強く、生産者としては安定したものを作るのは大変です。また、熟度が早いため初秋に飛来するカメムシの害を受けやすく、無農薬で作りきるのは本当に難しくなっています。収穫期が早いだけ晩秋のみかんに比べて糖の乗り方が弱く、少し小振りサイズのものから出荷しています。





無茶々園

明浜の百姓は、耕して天に至ると言われるような急峻な段々畑を代々受け継いできました。

この地が半農半漁の自給的生活からみかんの経済栽培へと移ったのが六十年前、私達がみかんの有機栽培に舵を切ったのは四十年前、明浜を飛び出して新規就農者とともに甘夏の出作りをはじめたのが十年前。農業や田舎も変わり続けています。私達は、生まれ育ったこの故郷にしっかり根ざしながらも、未来に向かって営々と生きていきたいと思っています。経済や農業のかたちがいかに変化しようとも、「兎追いし小鮎釣りし」田舎は永遠でありたいものです。



できるだけ自然のままに

1974年、地域農業の未来を案じ、農薬などの化学物質を多用する柑橘栽培に疑問を持っていたみかん農家の後継者たちがはじめた無農薬栽培の実験園が無茶々園の始まりでした。

『農薬や化学肥料に頼らないでみかん作りを行うこと』これが無茶々園のスタートであり、今でも基本としている考え方です。”人にも自然にも無理のない”栽培方針のもと、明浜では80軒以上の農家が無茶々園のみかん作りを行っています。


















大切なのは外見よりも味の良さ

無茶々園の農家は農薬や肥料の使用について、共通の栽培方針で柑橘作りに取り組んでいますが、農薬の使用を抑えればどうしてもみかんの見た目は悪くなります。自然環境に配慮して、一般の栽培で使用される腐敗防止用の農薬を使用しないため、一般に流通しているみかんに比べて痛みやすくなっています。届きましたらフタを開けて、つぶれたり、やぶれたり、痛みはじめている果実を取り除いてください。

また様々な大きさのものも入っていますが、それは一本のみかんの木にいろいろな大きさや形の実がなるように、自然のままのみかんを大切にしたいという思いからです。そんな私たちの思いをご理解いただければ幸いです。



柑橘が豊富な無茶々園では様々な種類の柑橘を収穫しています。季節ごとの旬の味覚を、ぜひお楽しみください。

 伊予柑 1月～2月	 不知火 (デコボン) 2～3月	 甘夏 3月～5月
 温州みかん 10月～12月	 ネーブル オレンジ 1～2月	 せとか 3月
 レモン 1月～2月	 八朔 2月～3月	 清見 3月～4月
 ポンカン 1月～2月	 はるか 2月～3月	 黄金柑 3～4月
		 ジュシー フルーツ 4～7月
		 なつみ 4月～5月
		 ひょう柑 4月～5月

販売されるお取引先さまによっては取り扱いがなかったり、名称が異なる場合がございます。